



TITLE:

漢代における尚書と内朝

AUTHOR(S):

福永, 善隆

---

CITATION:

福永, 善隆. 漢代における尚書と内朝. 東洋史研究 2012, 71(2): 219-249

ISSUE DATE:

2012-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/200231>

RIGHT:

# 漢代における尙書と内朝

福 永 善 隆

はじめに

一 皇帝と尙書

二 内朝及び尙書の展開——武帝期から後漢にかけて——

三 内朝・尙書の擴大・整備の背景

おわりに

## はじめに

周知のように、内朝は前漢武帝期以降の政治史及び官僚機構の展開のなかで重要な位置を占めるものとして、多くの研究者の注目を集めてきた。

その研究の嚆矢として増淵龍夫・勞榦・西嶋定生等の諸氏が挙げられるが、そこでは、武帝期以降、皇帝の側近により構成される内朝が臺頭し、それに伴い、丞相を中心とする既存の官僚機構（外朝）は國政上の實權を奪われたとされる<sup>1)</sup>。そして、そこでは尙書が内朝の中心に位置づけられている。

また、鎌田重雄氏は尙書に關する制度史的研究を行い、尙書の職掌・組織が擴大していく過程、尙書を巡る政權爭奪の様相を考察された<sup>2)</sup>。そして、前漢中葉以後、尙書の職權は次第に増大し、その掌握が政權の獲得に直結するようになった

こと、それに伴い、元來、宰相として位置づけられていた三公府は政務執行機關としての色彩を濃くしたとした。

以上の諸氏の所論はいずれも内朝とその中心たる尙書の權力擴大及びそれに伴う丞相の權力低下を大きな枠組みとする<sup>(3)</sup>。それに對して、富田健之氏はそのような武帝期以降における内朝の權力機關化及びそれに伴う、丞相を中心とした外朝の權力低下に疑義を呈された。すなわち、内朝はあくまで皇帝の國政統治に關する輔翼機能を有するに止まること、<sup>(4)</sup>内朝と外朝が補完しあうことにより皇帝を中心とする體制化された皇帝支配が進展していったことを指摘したのである。<sup>(5)</sup>さらに、氏は先に挙げた勞・西嶋・鎌田三氏が尙書を内朝の中心と位置づけるのに對し、尙書と内朝が「組織だった支配」のあり方を各々の面においてあらわすものであったとし、兩者の關係について別の角度から論じた。<sup>(6)</sup>そして、「組織だった支配」を體現するものではあるが、舊來のあり方をも残す内朝・外朝構造の發展的解消のなかで、尙書は體制化・組織化されていったとしたのである。<sup>(7)</sup>

この尙書と内朝とをひとまず區別してその實態をそれぞれ考察していく手法は、以降の研究において大きな流れとなっている。例えば、内朝に關して、藤田高夫・米田健志兩氏はその構成員の分析から内朝の性格を明らかにしようとされた<sup>(8)</sup>が、そこでは、内朝の構成員を加官を附與された者に限定し、尙書・將軍とは區別して分析している。

一方、尙書に關しては田中良・渡邊將智兩氏の研究がある。田中氏は前漢後半期の尙書について、一般の上奏文は尙書から朝廷に奏上されたのに對し、その経路によらない「封事」は内朝官により禁中において奏上されたと述べ、尙書は内朝官ではあり得ないとされた。<sup>(9)</sup>また、渡邊氏は前漢中期以降、尙書が宰相の權を奪ったとする定説に對して疑義を呈し、三公（前漢前半期は丞相・御史大夫・太尉、後半期は大司馬・大司徒・大司空、後漢では太尉・司徒・司空）及び尙書兩者が政策形成にどのように關わっていたかを追究された。<sup>(10)</sup>その結果、當該期において政策形成に専門的に關わっていたのは三公であり、尙書は文書傳達の中核機關として機能していたとされた。<sup>(11)</sup>

このように、現在、内朝と尙書はそれぞれ異なる視角からその實態が追究されてきている。ただし、『後漢書』列傳第

五三 李固列傳に、「又詔書に、侍中・尚書の中臣の子弟を禁じて吏と爲り孝廉に察せらるるを得ざる所以の者は、其の威權を乗りて、請託を容るるを以ての故なり」と、内朝に屬する侍中とともに尚書が「中臣」と述べられているように、兩者に一定の關係性が見られるのも事實である。

また、上に挙げた諸研究においては内朝と皇帝との個人的・人格的な結びつきが強調されているが、前掲の李固列傳の後文に、「尚書も亦た陛下の喉舌たり」とあることに端的に表れているように、尚書も一般の官僚と比べて、相對的に皇帝と深い關係を有していた。このように考えてくると、皇帝・内朝・尚書の三者は一定の關係性を持っていたと考えられるが、それらは具體的にはどのような關係にあつたのであろうか。

本稿は、以上のような問題意識に基づき、内朝・尚書について皇帝との關係の變化を動態的に考察し、もって、前漢中期から後漢における官僚機構の構造的變化の一端を追究しようとするものである。

## 一 皇帝と尚書

本節では、まず皇帝と尚書の關係について見ていくが、前漢の尚書に關する史料には限りがある。そこで、まずは比較的記載の多い後漢の尚書について考察していく。『後漢書』列傳第一九 劉愷列傳の注に、尚書について、

出納とは尚書を謂ふ。喉舌の官なり。出は上言を受け下に宣ふるを謂ひ、納は下言を聽きて上に傳ふるを謂ふ。

と、尚書を「喉舌の官」として、その性格を端的に表している。この「喉舌の官」は、皇帝と尚書との關係を表す語でもある。すなわち、同書列傳第五三 李固列傳には、陽嘉二（二三）年の李固の對策を載せているが、そのなかで、尚書について觸れて、

今陛下の尚書有るは、猶ほ天の北斗有るがごときなり。斗は天の喉舌たり、尚書も亦た陛下の喉舌たり。……尚書は王命を出納し、政を四海に賦わつ。

とあるように、尙書は「陛下の喉舌」であると述べられているのである。

では、喉舌とは具體的には何を指すのであろうか。富田健之氏は尙書の主要な機能を分析し、それを尙書の皇帝官房機能として總括された<sup>(12)</sup>。そして、尙書の政治構造上の位置を端的に表すものとして、その「問狀」機能に着目されている。

すなわち、『後漢書』列傳第二四 梁統列傳に、梁統が上言したときのこととして、

（梁）統復た上言して曰はく、有司以へらく、臣の今言ふ所は、施行すべからず、と。……願はくは召見せらるることを得、若しくは尙書の近臣に對して、其の要を口陳せん、と。帝尙書をして狀を問はしむるに、統對へて曰はく、……。

とあるように、尙書官僚による「問狀」が「召見」による皇帝との直接對話に準ずるものと認識されていたこと、それ故、當該期の尙書が政治構造的には人格的存在としての皇帝と一體化した、皇帝支配を體制的に表現する機構として發達してきたものと考えられることを指摘したのである。

一方、『北堂書鈔』卷六八 設官部第二〇 掾の條に引かれた崔寔『政論』には、

且つ三公は天子の股肱にして、掾屬は則ち三公の喉舌なり。天子 南面し、三公も亦た策を掾屬に委ねて以て天子に答ふ。

と、掾屬は「三公の喉舌」であるとされているが、實際、三公と掾屬の關係が、富田氏の指摘する皇帝と尙書との關係に對應することを示す事例がある。『後漢書』列傳第四四 楊秉列傳に、當時太尉であつた楊秉が中常侍侯覽・具瑗を彈劾したときのこととして、

書奏せらるるや、尙書（楊）秉の掾屬を召對して曰はく、公府は外職なるも、近官を奏劾す。經典・漢制に故事有るか。秉對へしめて曰はく、……漢世の故事に、三公の職 統べざる所は無し、と。尙書 詰する能はず。

と、尙書は太尉楊秉の上奏に關して聽取する際、楊秉本人ではなくその掾屬を召し、さらに、楊秉も彼らにその言い分を

「尙書」に「對」えさせているのである。これは尙書が人格的存在としての皇帝と一體化していたのと同様、掾屬も三公と一體化した存在であったことを示すものである。よって、三公と掾屬との關係は皇帝と尙書に對應し、それ故、尙書・掾屬はそれぞれ皇帝・三公の「喉舌」と表現されたと考えられるのである。

さらに、ここで尙書が皇帝と一體化した存在であったとする富田氏の見解をあわせ考えると、上の楊秉列傳の記事は、三公が「掾屬」に「策を委ねて」、「天子」に「答」えさせるという前掲『政論』の構圖と一致する。すなわち、皇帝と三公の對話を尙書と掾屬が代理していると考えられるのである。

このように考えてみると、次の記事が注目される。すなわち、『北堂書鈔』卷六八 設官部第二〇 掾の條に引かれた謝承『後漢書』には、

（馮岱）司徒劉寵の府に辟され、四府の掾屬と與に並びに臺に詣りて邊事を集議す。

と、四府（太傅・三公）がその掾屬とともに「臺」で「邊事を集議」しているのである。<sup>14</sup>この「臺」とはどのような場所であろうか。「臺」は、原義としては宮殿など四望しうる建築物を指すが、『後漢書』では特定の宮殿は「靈臺」・「露臺」等、具體名で記載されている。一方、ただ「臺」とする記載は尙書の官員に關する記事に見られるのである。

例えば、『後漢書』列傳第三一 鍾離意列傳に、藥崧という人物について、

（藥崧）家貧しく郎と爲るや、常に獨り臺上に直す。

とあり、郎であった藥崧は「臺上に直」していた。この條に、蔡質の『漢官儀』を引いて、

尙書郎入りては臺中に直し、官新しき青縑・白綾の被或ひは錦の被を供し、晝夜更宿す。

と注されていることから、藥崧は尙書郎として「臺」に宿直していたことがわかる。さらに、同書列傳第七〇上 黃香列傳には、章帝期のこととして、

（黃香）尙書郎を拜す。……常に獨り臺上に止宿し、晝夜省闔を離れず。

と、黄香も尚書郎として「臺上」に「止宿」している。ここに「獨り」とあることからするとそれは特例とも考えられるかもしれないが、先の蔡質『漢官儀』に見える規定は尚書郎全般に適用されるものである。このように考えてくれば、史料上ただ「臺」と稱される場所には、尚書が直していたと考えられるであろう。

また、『後漢書』列傳第三三 鄭弘列傳に、尚書令鄭弘の上奏として、

舊制、尚書郎は限滿ちて縣長・令史・丞・尉に補せらる。(鄭)弘奏して以爲へらく、臺職は尊しと雖も、酬賞甚だ薄く、開選に至りては、多く樂ふ者無し。

と、尚書郎が「臺職」と稱されていることから、尚書と「臺」との関係性が窺われる。さらに、同書列傳第二〇下 郎顗列傳に、郎顗が上奏したときのこととして、

書奏せらるるや、帝復た尚書に對へしむ。(郎)顗對へて曰はく、……臺(郎)顗を詰して曰はく、……。

とあるように、尚書への郎顗の「對」について、「臺」が詰問しているが、ここでの「臺」が尚書を指しているのは明らかであろう。

以上から、尚書と「臺」とは深く結びついていたと考えられる。<sup>(15)</sup> よって、前掲の謝承『後漢書』で太傅・三公とその掾屬が「邊事を集議」していた「臺」は尚書の直する場所であったと考えられる。すでに渡邊信一郎氏により指摘されているように、後漢になると司徒府の百官朝會殿あるいは宮中の朝堂で開催される大議の場合を除いて、議に皇帝が臨御することはなくなっていた。<sup>(16)</sup> さらに、先に挙げた富田氏の見解によると、當時尚書は皇帝と一體化した存在であった。これらのことをあわせ考えると、その集議の場には尚書も皇帝の意志傳達者として参席していた蓋然性が高いであろう。

周知のように、漢代を通じて、國家中樞部の意志決定は重層的な議を通して行われていたが、<sup>(17)</sup> 謝承『後漢書』に見える集議はその議の構造のなかでどのように位置づけられるのであろうか。その際、考慮すべきは、先行研究において、尚書・掾屬ともにそれぞれ政策議論に関わっていたことが指摘されている点である。

まず、尙書の政策議論としては、『後漢書』列傳第三三 朱暉列傳に、章帝元和年間（八四～八七）のこととして、是の時穀貴く、縣官の經用足らず。……尙書張林上言すらく、……盡く錢を封じ、一に布帛を取りて租と爲し、以て天下の用を通ずべし。又鹽は、食の急なる者なれば、貴しと雖も、人須<sup>も</sup>ゐざるを得ず。官自ら鬻<sup>ひ</sup>るべし。又宜しく交趾・益州の上計吏の往來するに因り、珍寶を市<sup>か</sup>ひ、其の利を收采すべし。……是において諸もろの尙書に詔して通議せしむ。（朱）暉林の言に據れば施行すべからずと奏し、事遂に寝む。

と、章帝は「尙書通議」で、尙書張林の提出した經濟政策案について尙書僕射であつた朱暉をはじめ「諸もろの尙書」に議論させている。この史料により先學諸氏の多くは尙書が政策案の作成・議論に参加していたとされるが、史料上、「尙書通議」の事例はこの一例しか見えず、その評價は各研究者により異なっている。例えば、楊樹藩・周道濟等諸氏は尙書において日常的に開催される政策議論の場とし、<sup>(18)</sup>富田健之氏は皇帝の諮問に應じて「政策の高度化」を圖り、その國政運営を輔翼する「尙書官合同會議」であるとされている。<sup>(19)</sup>それに對して、渡邊將智氏は、それが臨時に招集されたものであるとされる。<sup>(20)</sup>

しかし、『後漢書』列傳第一九 邳壽列傳に、邳壽が竇憲に陥れられたときのこととして、

侍御史何敞上疏して之を理めて曰はく、……臣伏して見るに、尙書僕射邳壽は臺上において、諸もろの尙書と與に匈奴を撃つを論ずるに、言議過差し、及び上書して公田を買ふを請ふに坐し、遂に獄に繋がれ大不敬と考効せらる。

臣愚以爲へらく、壽は機密の近臣にして、匡救を職と爲す。……又臺閣に事を平するに、可否を分爭す。

とあるように、尙書僕射であつた邳壽が諸尙書と「臺上」で匈奴討伐を議論しているが、ここには、「臺閣に事を平するに、可否を分爭す」とある。後述するように、「平」は「評」に通じ、評議することである。<sup>(21)</sup>とすれば、邳壽が「諸もろの尙書」と匈奴を撃つことを論じたのは正式な評議の場であつたと考えられる。

以上から、尙書において政策が議論されることがあつたと考えられるが、それは組織としての活動であつたのであろう



か。富田健之氏は前掲の朱暉列傳にみえる「尙書通議」の記事から尙書が「一つの組織として皇帝の詔を受けて國策の議論を行い上言するという機能を持っていた」とされる<sup>(22)</sup>。前掲朱暉列傳の後文に、その後の經緯を傳えて、

後に事を陳ぶる者復た重ねて（張）林の前議を述べ、以て國において誠に便なりと爲す。帝之を然りとし、詔有りて施行す。暉復た獨り奏して曰はく、……誠に明主の當に宜しく行ふべき所に非ず、と。帝卒に林等の言を以て然りと爲し、（朱）暉の重議を得て、因りて怒を發し、諸もろの尙書を切責す。暉等皆自ら獄に繋ぐ。三日、詔敕もて之を出す。曰はく、國家駁議を聞くを樂しむ。黃髮に愆無く、詔書過てるのみ。何の故にか自ら繋ぐ、と。暉因りて病篤しと稱して、肯へて復た議に署せず。……諸もろの尙書爲す所を知らず、乃ち共に暉を劾奏す。

と、尙書僕射であつた朱暉が「肯へて復た議に署」しなかつたことから考えると、尙書のなかで一定の意見の統一が行われたことが窺われる。すなわち、「署」とは「署名する」ことであり、よつて、「議に署す」とは議論の結果に署名し同意を示すことと考えられるのである。<sup>(23)</sup>さらに、「諸もろの尙書爲す所を知」らず、朱暉を彈劾したことからすると、その議論をまとめるためには朱暉の同意が必要不可欠であつたと考えられる。

以上のことから、尙書においては政策が議論されたが、それは尙書の意見としてある程度、吏員間で意見を統一させるためのものであつたと考えられる。

一方、政策形成における三公府の役割については、渡邊將智氏により考察されている。<sup>(24)</sup>ここでは、氏の見解を中心として三公府における政策議論の實態を確認しておく。まず、『後漢書』列傳第一四馬援列傳には、馬援が五銖錢の鑄造を上奏したときのこととして、

初め、（馬）援隴西に在りて上書し、宜しく舊のごとく五銖錢を鑄すべしと言ふ。事三府に下さるるも、三府奏するに以て未だ許すべからずと爲し、事遂に寝む。援還るに及び、公府より求めて前奏の難十餘條を得、乃ち牒に隨ひて解釋し、更めて表を具して言ふ。

とあるように、馬援の上書について三公府で議論されている。漢代の議について研究された渡邊信一郎氏は「三府議」について、宰相府の全體會議であり、事案によつては博士（祭祀）・廷尉（司法）・太常（祭祀）などの擔當官僚・學官も參加したと述べられている<sup>(25)</sup>。さらに、『三國志』卷一〇 荀攸傳 裴松之註に引かれた『漢末名士錄』に、

後黨禁 除解せらるるや、司空府に辟さる。三府の掾屬 會議する毎に、（何）顓 策謀に餘有り。議者 皆自ら以て及ばずと爲す。

と、「三府議」を「三府掾屬會議」と稱する記事を挙げ、そこに掾屬が參加していたとされている。

このように、尙書・掾屬は「臺上」・三公府における政策議論にそれぞれ関わっていたことがわかる。

一方、『後漢書』列傳第五 周舉列傳に、永和元（一三六）年のこととして、

詔して公・卿・中二千石・尙書を召して顯親殿に詣らしめ、問ひて曰はく、事を言ふ者 多く云はく、……北郷侯は親ら天子と爲るも葬るに王の禮を以てす。故に數しば災異有り。宜しく尊諡を加へ、昭穆に列すべし、と。羣臣の議する者 多く宜しく詔旨のごとくすべしと謂ふも、（周）舉 獨り對へて曰はく、……是において、司徒黃尙・太常桓焉等七十人 舉の議に同じくす。帝之に従ふ。

とあるように、公卿との集議に尙書が參加している。このことから、公卿と尙書との間では政策に関する意見交換が行われていたと考えられる。さらに、『後漢書』列傳第三七 班超列傳には、班勇が西域副校尉を敦煌に置くことを提議したと

きのこととして、  
鄧太后（班）勇を召し朝堂に詣り會議せしむ。是より先公卿 多く以爲へらく、宜しく玉門關を閉ざし、遂に西域を弃つべし、と。勇議を上りて曰はく、……今宜しく之を復し、復た護西域副校尉を置き、敦煌に居らしむること、永元の故事のごとくすべし。……尙書 勇に問ひて曰はく、……太尉屬毛軫 難じて曰はく、……是において勇の議に従ひ、敦煌郡の營兵三百人を復し、西域副校尉を置きて敦煌に居らしむ。

と、鄧太后が朝堂で會議を開いている。渡邊信一郎氏によれば、朝堂は「公卿を中心とする官僚會議の場」であり、三公が日常的に「朝事」を執行する場であった。<sup>(26)</sup> よって、この議には公卿が參席していたと考えられるが、その際、尙書・太尉・太尉ともに班勇に質疑している。ここで尙書・公卿が政策議論において同様に重要な役割を果たしていたことをあわせ考えると、この議において両者は意見交換を行っていたと考えられるのである。

このように考えると、前掲の謝承『後漢書』での集議は三公と尙書が政策に關する意見を交換・議論する場であったといえる。さらに、上で述べた「三府議」や尙書での議論には、それに向けてそれぞれの組織としての意見を統一させる目的のもと行われたものがあつたと考えられるのである。

以上、本節では「喉舌」という表現を通して、尙書・掾屬とが對應關係にあり、それぞれ皇帝・三公の官房を形成していたと考えられること、さらに、「臺上」・三公府ではそれぞれの組織としての意見を統一するための政策議論が行われ、尙書・掾屬はそれぞれの議で中心的な役割を果たしていたことが明らかにされた。

ただし、尙書を「喉舌」とする表現は、『漢書』には見られない。とすれば、本節で明らかにした尙書の實態は後漢に限られるものかもしれないが、富田氏が指摘されるように、『藝文類聚』卷四八「職官部四」尙書の條に引かれた、前漢成帝期の人、揚雄の『尙書箴』では「王名を出入す。王の喉舌」と尙書を「喉舌」と稱している。<sup>(27)</sup> また、櫻井芳朗氏は尙書の職務分掌が成帝期に初めて行われたことについて、「尙書の四曹が成帝の時に初めて設けられたとしても、それには古の制を復活させようといふ精神があり、之によって宣帝昭帝時代、更に遡って武帝時代の尙書を想像することも不當ではなからう」とし、<sup>(28)</sup> さらに、本節で述べた、天子の喉舌について、「尙書の職權がかやうであつたから、既に西漢の時、尙書には丞相を壓する者が出で、後漢になれば尙書臺が丞相の如く、權勢は三公をしのいだ」と<sup>(29)</sup> されている。後漢の尙書が丞相と同じく宰相と位置づけられたのかという点について問題はあつたものの、後漢の尙書を前漢武帝期以降の發展の上に捉える點で、その見解は一致している。このように考えてくれば、前漢の展開を経て尙書が上に見たような「喉舌」の實

態を備えるようになったと考えられるであろう。そこで、次に前漢を中心として尙書の展開について考察していく。

## 二 内朝及び尙書の展開——武帝期から後漢にかけて——

前節では、後漢において尙書と公卿が政策に關する意見を交換・議論することがあったことを踏まえると、次の記述が注目される。すなわち、『漢書』卷六四上 嚴助傳に、武帝期のこととして、

武帝（嚴）助の對を善しとし、是より獨り助を擢きて中大夫と爲す。後朱買臣・吾丘壽王・司馬相如・主父偃・徐樂・嚴安・東方朔・枚皋・膠倉・終軍・嚴葱奇等を得、並びに左右に在らしむ。……上助等をして大臣と辯論し、中外相ひ應ずるに義理の文を以てせしむるに、大臣數しば詘けらる。

と、「中外相ひ應ずるに義理の文を以てす」とあるように、武帝は嚴助などの側近に「義理の文」によって「大臣と辯論」させているのである。

武帝の側近と大臣が「辯論」した實例としては、『漢書』卷五八 公孫弘傳に、御史大夫公孫弘が朔方郡を置くことの非を論じたときのこととして、

時に又東のかた蒼海を置き、北のかた朔方の郡を築く。（公孫）弘數しば諫めて以爲へらく、……願はくは之を罷めよ、と。是において、上乃ち朱買臣等をして弘を難ぜしむ。朔方を置くの便なること、十策を發するに、弘一を得ず。

と、ここでは前掲の嚴助傳で武帝が「左右」に置いたとする朱買臣等に、公孫弘と朔方郡設置の利を論じさせている。同書卷六四上 主父偃傳には、この議の經緯について、

（主父）偃盛んに、朔方の地肥饒にして、外河に阻る。蒙恬城を築きて以て匈奴を逐ふ。内轉輸戍漕を省き、中國を廣め、胡を滅すの本なり、と言ふ。上其の説を覽て、公卿の議に下すも、皆便ならずと言ふ。公孫弘曰はく、

……朱買臣 弘を難誦し、遂に朔方を置く。本偃の計なり。

とあり、彼らが公孫弘を難誦したのは「公卿の議」という公式の場であつたことがわかる。

これらの側近が集められた理由の一つが、公卿と政策議論を行わせることであつたことは、次の記載からも窺われる。すなわち、前掲の嚴助傳の後文に、

其の尤も親幸せらるるは、東方朔・枚皋・嚴助・吾丘壽王・司馬相如たり。相如は常に疾と稱して事を避く。朔・皋は持論に根づかず、上頗る俳優もて之を畜ふ。唯だ助と壽王とのみ任用せられ、助最も先づ進む。

と、武帝期の側近がそれぞれ親幸された理由について述べられているが、なかでも嚴助と吾丘壽王が任用されたとある。ここに、東方朔・枚皋について、「持論に根づかず」とあることから、嚴助と吾丘壽王が特に任用された理由の一つとして「持論に根づいていたことが重視されたと考えられるのである。なお、『漢書』卷六四上 嚴助傳の顔師古注に、

中は天子の賓客を謂ひ、嚴助の輩のごときなり。外は公卿大夫を謂ふなり。

とあり、嚴助をはじめとする側近達は「天子の賓客」として扱われたことがわかる。

以上のような皇帝の側近と大臣とによる政策議論は前節で明らかとした後漢における尙書と公卿との政策に関する意見交換・議論へとつながるものと考えられる。では、それはどのように前節で述べたような後漢の情況へと展開していくのであろうか。周知のように、上で挙げた武帝期の側近は内朝の萌芽とされている。<sup>(30)</sup> よつて、この問題について追究するには内朝について考察していかなければならないであろう。

先行研究では、内朝は加官によって構成される、皇帝との個人的・人格的な結びつきを有する官僚群とされている。<sup>(31)</sup> 『漢書』卷一九上 百官公卿表に、それら加官について、

侍中・左右曹・諸吏・散騎・中常侍、皆加官。……員亡く、多くは數十人に至る。侍中・中常侍は禁中に入るを得、諸曹は尙書の事を受け、諸吏は法を擧ぐるを得、散騎は騎して乘輿の車に並ぶ。給事中も亦た加官。……顧問應對を

掌り、位中常侍に次ぐ。

とあり、その一員である諸曹は「尚書の事を受」けていたことがわかる。また、同條の晉灼注に引かれた『漢儀注』に、諸吏・給事中について、

諸吏・給事中 日ごと上りて朝謁し、尚書の奏事を平し、分れて左右曹を爲す。

と、諸吏・給事中が「尚書の奏事を平」したとある。これについて、米田健志氏は「平」を評議、「尚書の奏事」を尚書が取り次いだ上奏文の意に解し、皇帝が上奏文を決裁するにあたり、「より頻繁に行われる極めて日常的な——それ故に史料に記録されにくい——評議」であるとされている。<sup>(32)</sup>『後漢書』列傳第三六 郭躬列傳に、明帝期のこととして、

(秦) 彭 別屯に在りて輒ち法を以て人を斬る。(寶) 固 彭の專擅なるを奏し、之を誅さんことを請ふ。顯宗 乃ち公卿・朝臣を引きて其の罪科を平せしむ。(郭) 躬 法律に明るきを以て、召されて入りて議す。

とあるように、明帝は公卿・朝臣に秦彭の罪を「平」させている。郭躬は法律に明るかったため「議」に参加していることから、ここでの「平」が評議の意であることは明らかである。よって、「平」を「評議」の意とする米田氏の所説は首肯できるものである。このように、内朝を構成する官僚は「尚書の奏事」の評議を通じて、一定の意見統一を行っていたと考えられるのである。ただし、前掲した嚴助傳の記事で、大臣と議論していたのは、皇帝の側近であったが、それと同様、ここでも尚書の奏事を「平」していたのが尚書の構成員ではない点には注目される。後漢になると、内朝を構成する加官群のうち、侍中・給事中は本官化し、その他は廢止されるが、富田氏はそれが内朝・外朝構造の發展的解消を示すものであり、内朝・外朝構造を包攝したところに尚書が現れるとされる。<sup>(33)</sup>

一方、『漢書』には、尚書の具體的な活動を示す記載は非常に少ないが、『續漢書』百官志第三 少府の條の本注に、尚書について、

成帝 初めて尚書四人を置く。……世祖 承遵し、後二千石曹を分ち、又客曹を分ちて南主客曹・北主客曹と爲し、凡

## そ六曹。

とある。この記述には『漢書』・『漢舊儀』の記載と矛盾する点が見られるものの、先學諸氏により、成帝期に初めて尙書の職務分掌が行われたことを示すものとされている。<sup>(34)</sup> 富田氏は宣帝期→王莽期に新たな皇帝支配の體系化が進んだとし、尙書に對するこれらの改變は皇帝官府機能の強化を目的とするものであるとされている。<sup>(35)</sup> その後、上掲の『續漢書』百官志にもあるように、光武帝期にはさらにその組織整備が進んでいく。これらのことをあわせ考えると、前漢後半期から後漢にかけて尙書の組織整備が進み、その重要性を高めていったと考えられるであろう。『漢書』卷七十二 龔勝傳に、哀帝期のこととして、

是より先（夏侯）常又（龔）勝の爲に高陵に子の母を殺す者有りと道ふ。勝之を白すに、尙書誰より受くと問ふ。……尙書勝をして常に問はしむ。……奏事詳らかならず、妄りに罪に觸るるを作す、と。勝窮し、以て尙書に對ふる亡し。

と、尙書が當時内朝に屬していた給事中であつた龔勝の「白」に對して取り調べを行っている。ここで、第一節で述べたように、成帝期までには尙書が「喉舌」と稱されるようになっていたことをあわせ考えると、上に述べた整備を経、その重要性を増した尙書の姿を端的に示すものとして捉えられる。

一方、丞相府でもこれと同様な動きが見られる。武帝期より前の丞相府における政策立案・審議の情況については、『史記』卷一〇一 袁盎列傳に、文帝期のこととして、

袁盎還りて、其の吏に愧ぢ、乃ち丞相の舍に之きて謁を上し、丞相に見えんことを求む。丞相良や久しくして之に見ゆ。盎因りて跪きて曰はく、願はくは間を請はん、と。丞相曰はく、使君の言ふ所公事なれば、曹に之き長史・掾と與に議せ。吾且に之を奏さんとす。卽し私なれば、吾私語を受けず、と。

と、丞相申屠嘉が「使君の言ふ所公事なれば、曹に之き長史・掾と與に議せ」と述べていることから、漢初から掾は丞

相府における政策立案に関わっていたことが窺われる。

ただし、武帝期にはそれまでとは異なる政策立案・審議のあり方が見られるようになる。すなわち、『漢書』卷五八公孫弘傳に、先に挙げた朔方郡設置に關する議論で、朱買臣等に難詰された公孫弘が丞相に就任したときのこととして、

（公孫弘）徒歩より起ちて、數年にして宰相に至り侯に封ぜらる。是において、客館を起こし、東閣を開きて以て賢人を延ぎ、謀議に與參せしむ。弘身一肉・脫粟の飯を食らひて、故人・賓客衣食を仰ぐ。奉祿皆以て之に給し、家に餘す所無し。

と、彼は「客館を起こし、東閣を開きて以て賢人を延ぎ、謀議に與參」させている。<sup>(36)</sup>

さらに、同條の顏師古注に、「東閣」について、

閣は、小門なり。東向して之を開き、……賓客を引き、以て掾史官屬より別つなり。

とあるように、公孫弘が招いた「賢人」は「掾史官屬」とは異なる「賓客」として扱われていたのである。このような丞相府における變化の背景としては、前述した皇帝の側近との議論に備えるために、より綿密に政策立案・審議を行う必要性が生じたことが考えられる。

ただし、『漢書』卷五八 公孫弘傳に、公孫弘の後任の丞相達について、

（李）蔡より（石）慶に至るまで、丞相府の客館丘虛なるのみ。（公孫）賀・（劉）屈鼂の時に至りて壞ちて以て馬廐車庫奴婢の室と爲す。

とあり、丞相府に賓客が集められたのはあたかも公孫弘の在任期に限られるかのようなのである。このことはどのように考えたらよいであろうか。『漢書』などの記載を見ると、前漢後半期になると、丞相府の屬官として議曹等、新たな曹が見られるようになる。<sup>(37)</sup>史料に限りがあり、その實態は詳察できないが、その曹の名が「議」であるからには先の賓客と同じく、「謀議」に関わっていたのであろう。



一方、『漢舊儀』において、漢初の丞相府の組織について述べた箇所では、

丞相 初め吏員十五人を置き、皆六百石、分ちて東西曹と爲す。

と、東西曹しか挙げられていない。一方、同書には、

武帝元封元（前一一〇）年、御史止めて復た監せず。後御史の職 丞相と與に吏員を増すに<sup>もすか</sup>參る。

と、武帝元封元年以降、御史大夫とともに丞相府の吏員が増員されている。周知のように、前漢前半期、武帝期より前には黃老思想に基づく清靜政治が貴ばれ、丞相就任者にもそれを信奉するものが多かった。そこでは、民間の自律的秩序への強權の介入を避け「無爲」の統治が目指された。<sup>(38)</sup>武帝期以降そのような方針に變化が生じ、それに伴い、丞相府の組織は大幅に整備されたと考えられる。實際、筆者はかつて武帝期における丞相の人事機能の強化及びそれに伴う監察機構の整備を論じたことがある。<sup>(39)</sup>ここから、公孫弘による「賓客」の招集は各曹が整備されていく前段階であったといえる。掾屬は府において各曹を統轄する幹部である。<sup>(40)</sup>とすれば、曹の整備はそのまま掾屬の整備につながるであろう。

以上、武帝期には皇帝・丞相の周りに謀議を掌る賓客が集められたが、それは次第に内朝・曹へと發展していく。そして、それに伴い、それぞれ尙書・掾屬の整備が進み、重要性を増していったと考えられるのである。

ここまで武帝期に賓客として集められた皇帝の側近が次第に内朝へと發展し、ついには「喉舌の官」としての尙書が現れたこと、同様の現象は丞相府においても見られることを指摘してきたが、これらの動きはどのような方向性を持っていたのであろうか。

かつて和田清氏は「天子の側近の私的の微臣が次第に權力を得て、表面の大官を壓し、やがて之に取って代る」という「内」から「外」へという「官制の波紋的循環發生論」を提唱され、<sup>(41)</sup>これを承けて、これまで内朝・尙書に關する研究が進められてきた。

では、この「内」から「外」へという變化は具體的にはどのような變化として捉えられるのであろうか。その際、まず

注目されるのはその執務の場所である。禁中は皇帝の私的な空間とされ、<sup>(43)</sup>すでに内朝と禁中との深い関係が指摘されている。『獨斷』巻上に、禁中について、

禁中とは門戸に禁有りて、侍御する者に非ざれば入るを得ず。故に禁中と曰ふ。孝元皇后の父大司馬陽平侯、名は禁、當時之を避けて、故に省中と曰ふ。

とあるように、禁中は「侍御」する者でなければ出入りできない空間であったが、内朝を構成する侍中について、『續漢書』百官志第三 少府の條の注に、蔡質『漢儀』を引いて、

又侍中は舊中官と俱に禁中に止まる。武帝の時、侍中莽何羅 刃を挟みて逆を謀る。是より侍中 禁外に出で、事有れば乃ち入り、畢れば即ち出づ。王莽 政を乗るや、侍中 復た入り、中官と共に止まる。章帝元和中、侍中郭舉 後宮と通じ、佩刀を抜きて上を驚かす。舉 誅に伏し、侍中 是より復た外に出づ。

とある。ここからわかるように、當初、侍中は「禁中に止」まっていた。

一方、尙書について、参考にするべきは楊鴻年氏の見解である。<sup>(44)</sup>氏は宮中の空間を宮と省とに分ち、尙書を宮中省外で活動する宮官とされた。さらに、渡邊將智氏も後漢洛陽城の構造を分析し、後漢の尙書が禁中の外で執務していたとされている。<sup>(45)</sup>この點について、『後漢書』列傳第三二 鍾離意列傳に、明帝期のこととして、

時に詔して降胡の子に縑を賜ふに、尙書 事を案じて、誤りて十を以て百と爲す。帝 司農の上簿を見て、大ひに怒り、郎を召して將に之を咎たんとす。(鍾離) 意 因りて入りて叩頭して曰はく、……臣 當に先づ坐すべし。

とあるように、當時尙書僕射であった鍾離意が「入りて叩頭」している。この事件について、『太平御覽』卷二二 職官部第九 左右僕射の條に引かれた『鍾離意別傳』に、

(鍾離) 意 尙書僕射と爲る。其の年匈奴 來降し、詔して縑三百疋を賜ふ。尙書侍郎暨鄧 詔を受け、誤りて三千疋を以て匈奴に賜ふ。詔して大ひに怒りて鄧を鞭ちて死なんと欲す。意 獨り省閤を排して入りて明帝を諫む。

とある。匈奴に賜った縑の正数が異なるが、事件の経緯からして同じことを傳えたものと考えられる。ここで、鍾離意が「省閤を排」して入ったことからすると、後漢において尙書は「省閤」の外、すなわち禁中の外で勤務していたと考えられる。

このように、前漢の内朝とその展開に伴い整備を経た後漢の尙書とではその執務場所が禁中の内外で異なっていたと考えられるが、このことは單なる執務場所の變化以上の意味を持っていると考えられる。その際、注目すべきは佐原康夫氏の見解である。氏は官衙の構造を分析され、「閤」の内外で長官との人格的結びつきが重視される世界と官僚的ヒエラルキーの論理に支配される世界とに分かれるとされた<sup>(46)</sup>。すなわち、門は上に述べた二つの世界を分かち役割を果たしていたのである。また、森谷一樹氏はそれをさらに展開し、宮中では爵制ヒエラルキーとも、官秩を指標とする官制ヒエラルキーとも違う、別の論理が働いていたとされる<sup>(47)</sup>。この兩氏の見解に對應するように、その執務場所が禁中の内外で異なる前漢における内朝と後漢の尙書とではそれぞれ従う秩序原理も異なっていた。藤田高夫氏は内朝を形成する加官群相互には統屬關係がなかったと指摘されたが、筆者はそこから官秩とは別の秩序原理が働いていたことを明らかにした<sup>(48)</sup>。すなわち、皇帝との親近性がその待遇に反映し、それが皇帝との物理的距離により表されていたのである<sup>(49)</sup>。

一方、尙書について、『續漢書』百官志第三少府の條には、「尙書六人、六百石」とあり、少なくとも後漢までに尙書は官僚秩序に組み込まれていたと考えられる<sup>(50)</sup>。このことは『後漢書』列傳第五三李固列傳に、「今陛下と共に天下を理むる者、外は則ち公卿尙書、内は則ち常侍黃門なり」と、尙書が公卿とともに「外」とされていることに合致する<sup>(51)</sup>。また、先述したように、後漢になると内朝に屬する加官のうち多くは廢止され、侍中のみが本官として残されるが、このことも皇帝との個人的・人格的關係に基づき皇帝を輔佐していた内朝が次第に官僚機構に組み込まれていくという點で、関連があるであろう。ただし、「はじめに」で舉げた、「侍中・尙書の中臣」とする李固の言からは、公卿と比べ、侍中・尙書が依然として皇帝との親近性を保持し、皇帝官房としての機能を果たしていたことが窺われる<sup>(52)</sup>。

このように考えてみると、上述した武帝期の賓客としての側近から内朝へと發展し、その發展とともに尙書が整備されていく過程は皇帝を輔佐する官房が次第に官僚機構として組織化されていったことを示すものとして捉えられる。

一方、このような變化は丞相府においても同様に見られる。前掲した公孫弘傳の「東閣」に關する顏師古注では、「東閣」を開くことによって、賓客を「掾史官屬より別」つたとある。ここで、先の佐原・森谷兩氏の見解を踏まえると、賓客は「東閣」内を主な活動の場所とし、それ故、丞相との個人的關係が働いていたと考えられる。そして、この點は、前掲の公孫弘傳に、「故人・賓客衣食を仰ぐ。奉祿皆以て之に給し、家に餘す所無し」と、賓客が公孫弘の私財によって養われていたことから窺われるであろう。一方、掾屬はその外を主な活動の場とし、官秩を持つ屬官として官制ヒエラルキーに組み込まれていた。ただし、その一方で、『北堂書鈔』卷六八設官部第二〇掾の條に引く『漢舊儀』には、

丞相の掾史 見禮師弟子のごとし。白錄して朝を拜さざるなり。

とあり、佐原康夫氏は「屬吏幹部層が禮遇すべき存在として扱われたことを示す」とされる<sup>(53)</sup>。ここでは「掾史」となっており、「掾屬」との關係はわからないが、少なくとも屬よりも上位にある掾は丞相と上司と部下を超えた親近性を保持していたと考えられる。

このように考えると、皇帝の周邊・丞相府において、武帝期を起點として、それぞれの官房を強化する動きが見られたが、それは次第に官僚秩序のなかに取り込まれ、組織化されていったと考えられる。かつて佐原康夫氏は「漢代の官衙は、空間的にも、また人間關係の面でも、長官を主人とする一種のミニ朝廷であつた。漢代の官僚機構は、このようなミニ朝廷の累層として捉えられる」と述べられた<sup>(55)</sup>。このことを踏まえると、上の考察で明らかとなった、皇帝・丞相の側近の展開は同じ方向性をもった事柄が並行的に進行していたものと捉えることもできるであろう。

### 三 内朝・尚書の擴大・整備の背景

第二節では、内朝から尚書の發展に至る過程と丞相府における機構整備が互いに軌を一にして進展していたことが明らかとなった。かつて佐原康夫氏は主に丞相府と郡太守府の官僚・空間構造を分析し、その同質性を述べられたが、郡府においても上のような變化は見られるのであろうか。最後に、この点について考察し、内朝・尚書が擴大・整備された背景を追究していく。

先行研究で述べられているように、内朝の萌芽は皇帝の賓客として位置づけられる側近にあった。彼らは皇帝の最も側近に侍っていたが、これと同様の存在が郡府においても見られる。すでに指摘されているように、『漢書』卷四八 賈誼傳に、文帝期のこととして、

河南守吳公 其（賈誼）の秀材を聞き、召して門下に置き、甚だ幸愛す。

とあるように、太守が優秀な人材を「門下」として養っているのである。

嚴耕望氏は郡府の屬吏組織をその職掌により、網紀・門下・列曹・監察の四つに分類された。<sup>(57)</sup>すなわち、網紀を總務的任務をつかさどる部門、門下を太守の側近にあつて顧問・祕書・警護などの任務にあたる部門、列曹を民政上の實務を處理する部門、監察を縣を巡行・監察する督郵とされたのである。さらに、佐原康夫氏は史料上に見える「門下」をその性格上の違いにより前漢初期から存在する賓客としての門下と、前漢後期に形成された屬吏としての門下に區分された。<sup>(58)</sup>氏によれば、兩者とも長官の顧問・補佐役を務めていたが、前者は賓客として長官の私的保護を受けたのに對し、後者は側近として長官の屬吏と化していた。すなわち、「本來私從として主人の身近に仕えることを意味した」前者の門下が、前漢後期における地方行政機構の整備に伴い、「側近として仕えることを媒介に、エリート官名」としての後者に轉化していったのである。<sup>(59)</sup>このような門下の變遷は、第二節で述べた、皇帝の賓客として扱われた武帝期の側近が加官を経て次

第に本官化され、官僚秩序に組み込まれていくという内朝官の展開を想起させるものであろう。

上述した「門下」の變質の過渡期である前漢中期の實態を示すのが、次の記載である。すなわち、『漢書』卷八九 文翁傳に、景帝末年に蜀郡太守となった文翁のこととして、

（文翁）常に學官の童子を選び、便坐に在りて事を受けしむ。出でて縣を行する毎に、益ます學官の諸生の明經にして飭行なる者を従へ與俱にし、教令を傳へ、閭閻に出入せしむ。

とあるように、文翁は「學官の童子」を選んで「便坐」で「事を受け」させている。ここには、以下のような内朝官との共通性が窺われる。

第一に、その勤務場所であるが、佐原氏によれば、便坐は正堂の奥にある長官の私的空間であり、「閭閻」によって距てられていた。<sup>(60)</sup>このような「便坐」は、米田氏も指摘するように、内朝官が主に活動の場とする、禁門に圍まれた禁中に對應するものであろう。<sup>(61)</sup>第二に、佐原康夫氏も述べられているように、門下は顧問應對を掌っていたが、この點も先學諸氏によってすでに指摘されている、顧問應對を掌る内朝官の機能と共通する。

次に、嚴耕望氏は郡府における主簿の職掌の性質・地位の變遷から尙書令との類似性を指摘されている。<sup>(62)</sup>そこで、ここでは主簿と尙書との類似性を考察していく。ただし、嚴氏は主簿を門下に位置づけるが、<sup>(63)</sup>それとは異なる見解が見られる。佐原氏は主簿を諸曹の文書をまとめる係であり、その最高幹部として書類書きに追われていたとされ、列曹の一員であるかのように位置づけている。<sup>(64)</sup>一方、紙屋正和氏は嚴氏に従って、郡府の屬吏を綱紀・門下・列曹に分類される。その際、氏は主簿は「門下の一員に位置づけられるものの、郡・國の守・相などの意志を列曹につたえ、列曹の業務をとりまとめる任務もおびる」とされた。<sup>(65)</sup>すなわち、氏は門下と列曹の雙方を管理する立場として、主簿を位置づけ、その重要性をさらに強調されるのである。そこで、この點について確認していく。『漢書』卷九〇 嚴延年傳には、嚴延年が河南太守であったときのこととして、

(嚴延年) 誅殺せんと欲する所は、奏手に成り、中の主簿・親近の史聞知するを得ず。

と、「中の主簿・親近の史」と列擧<sup>(66)</sup>されている。よって、主簿が親近の臣の一員であったことが窺われる。さらに、尹灣漢墓簡牘五號木牘背面第二段一四行目には、「胡君門下祭酒主簿」とある。また、『後漢書』列傳第一九 鄧綰列傳に、汝南太守歐陽歙について、

時に饗禮に臨みて訖り、(歐陽)歙教して曰はく、……主簿教を讀み、戶曹延を引きて賜を受けしむ。

と、主簿は歐陽歙の「教」を承けてそれを傳えている。これは第一節に掲げた『後漢書』列傳第二九 劉愷列傳の注で、「出は上言を受け下に宣ぶるを謂ひ、納は下言を聽きて上に傳ふるを謂ふ」と述べられた尙書の職掌と重なるものである。さらに、同書列傳第二一 王堂列傳に、汝南太守王堂の掾史達への教令として、

乃ち掾史に教して曰はく、……其の朝右に憲章し、才職を簡覈せんことは、功曹陳蕃に委ねん。政を匡し務を理め、遺を拾ひ闕を補ふは、主簿應嗣に任ぜん。

と、應嗣は「主簿」として「拾遺補闕」していたが、これに對する『後漢書』の贊に、「(王)堂は良肱を任ず」とある。このことからすると、主簿は太守の補佐役としての位置づけも有しており、「拾遺補闕」はそのような主簿の位置づけを端的に表すものと考えられる。この點も上で述べた、官房として皇帝を輔佐した尙書と重なる部分があるといえよう。

また、佐原氏は墓室の構造及びそこに描かれた壁畫がそれぞれ實際の官衙・官吏に對應していることを明らかにされた<sup>(67)</sup>が、そこで擧げられた河北省望都縣の望都一號漢墓では、主簿は前室の一番奥、執務の場所と太守の私的空間をわける中門にあたる甬道の入り口が一番近くに描かれているとする。實際、謝承『後漢書』朱震傳に、

時に戶曹史袁叔穉微愆を以て、太守郭宗怒り、閤を閉ぢ之を罰す。衆皆悚懼するに、(主簿朱)震闔を排して直入し、乃ち前みて諫めて曰はく、……。

とあるように、普段は主簿は「闔」の外で執務していたが、前掲した嚴延年傳に「中の主簿・親近の史」と「中」と表現

されていることからその位置づけが窺われる。この主簿の執務場所の位置は第二節で述べた尙書の執務場所に對應する。よって、その職掌・官衙における位置づけ・執務場所の位置から主簿と尙書は對應しているといえるであろう。

以上の考察により、主簿・門下はそれぞれ尙書・内朝に對應していると考えられるが、このように捉えた場合、注目すべきは郡府の機構整備に關する紙屋正和氏の見解である。<sup>(69)</sup>氏は前漢前半期の郡府は全體として極めて小規模で、屬吏組織は未分化・未發達の状態であつたが、前漢後半期にはその屬吏組織が擴大・分化していくことを指摘された。ただし、前漢後半期には綱紀・門下はすでに充實していたが、列曹は手薄であつた。列曹が充實し、郡・國府と道・縣廷の屬吏組織がおおむね對應するようになるには後漢まで待たなければならぬとされるのである。先に述べたように、嚴耕望氏が稱する綱紀とは總務的任務を擔當する部門であり、門下は内朝に相當する部門であつた。富田健之氏は尙書を皇帝官房として捉え、三公九卿の政務執行をより高い次元から運用するものであつたとされた。<sup>(70)</sup>このような尙書の役割は總務的任務を擔當する綱紀にもつながるものであらう。

では、上のような郡府の機構整備はいつから始まったのであらうか。郡府における機構整備の背景として、紙屋正和氏は地方統治における郡の位置づけの變化を想定される。この點に關しては、重近啓樹・紙屋正和・佐藤直人・小嶋茂稔等、先學諸氏の研究があるが、その時期には幅がある。すなわち、紙屋・佐藤兩氏は武帝期、重近・小嶋兩氏は宣帝期をそれぞれ中心として論じられるのである。ただし、重近・小嶋兩氏も、その變化の兆候が武帝期にすでに見られることは認めている。<sup>(71)</sup>とすれば、皇帝・丞相がそれぞれその官房を強化していくのとはほぼ同時期に、郡府でも同様な動きが見られたことになる。<sup>(72)</sup>

すでに指摘されているように、皇帝・丞相・地方長官には同質性が見られる。すなわち、渡邊信一郎氏は漢代の國家機構が皇帝——命官の第一次的君臣關係と官長——屬吏の第二次的君臣關係との二重の君臣關係によって運営され、各官府の一定の自立性を認める「官府の重層的連合體」の形態をとっていたとされた。<sup>(74)</sup>また、下倉涉氏は皇帝・「三公」・地方



長官はともに政治的主體性・陰陽調和の擔い手であり、「天」を戴き、「臣」を従え、「民」に對峙する「君」として同様の政治的地位にあったと主張される。<sup>(75)</sup> 氏の分析は主に後漢を對象とするが、筆者はかつて皇帝と丞相のもとにある監察官の類似性が前漢における兩者の類似性の證左の一つとなりうると論じた。<sup>(76)</sup> 一方、地方長官について、仲山茂氏は居延漢簡の「白事簡」を分析し、そこには屬吏の「白」に對して長官が「教誥」を與えるという、朝廷における群臣の上奏と皇帝の「制可」と同様の關係が見られることから、長官と屬吏の關係が君臣關係に近いものとして捉えられるとされている。<sup>(77)</sup> これと渡邊氏の見解をあわせ考えると、<sup>(78)</sup> 下倉氏の述べる三者の類似性は前漢にまで遡る可能性が高いであろう。このように考えてくると、本稿で述べた、武帝期を起點として行われた、皇帝の周邊・丞相府・郡府における機構整備の動きも關連性のあるものとして捉えられるであろう。

## おわりに

以上、本稿では尙書と内朝の關係を考察し、それと關連して、漢代官僚制のもつ構造的性質について論究した。本稿での要點をまとめると、以下ようになる。

- ① 後漢において、尙書・掾屬はそれぞれ皇帝・三公の官房として、「喉舌」と表現されたが、兩者とも尙書・三公府において、政策を議論し、意見を統一する議で重要な役割を果たした。
- ② 後漢において、それぞれの組織で議論され、統一された意見は、尙書・三公・掾屬が参加する議などで相互に意見交換・議論されることがあった。
- ③ 前漢武帝期以降、皇帝の周邊で政策を議論したのは侍中・給事中などの皇帝と個人的・人格的な結びつきを有する側近であった。彼らは尙書に關わることによって、ある程度の意見統一を行っていたと考えられる。

④ 内朝の萌芽が見られる武帝期には、丞相府においても賓客を政策議論に参加させるようになったが、これは皇帝の側近との政策議論に備えるためであった。その點で、後に尚書と三公府との間で行われる政策議論の淵源は武帝期に見られるといえる。

⑤ 當初、皇帝官房の中心は、内朝に屬する加官群であったが、前漢後半期から後漢にかけて尚書の機構が整備されていくのに伴い、尚書がその重要性を高めていく。このような動きは皇帝官房機能が次第に官僚機構として組織化されていく過程として捉えられるが、それは丞相府における組織整備と對應するものであった。

⑥ 郡府において、内朝は門下、尚書は主簿にそれぞれ對應する。

⑦ 皇帝・丞相がそれぞれ官房を強化していくのとはほぼ同時期に、郡府でも主簿・門下を中心とする長官官房の強化が始まり、その地方政治における重要性が高まっていく。皇帝・丞相・太守三者の同質性を考えるとこれらは一環した動きとして捉えられる。

以上、本稿では後漢の尚書・三公の據屬の實態を踏まえ、そこに至る過程について武帝期を起點として前漢後半期までの展開を中心に明らかにし、さらに、それと同様な長官官房を強化する動きが郡府でも見られることを明らかにした。すなわち、前漢武帝期に始まる尚書・内朝の形成・強化は中央にとどまるものではなく、全國的な動きに對應するものとして捉えられるのである。このように捉えた場合、その背景として何が想定できるであろうか。富田健之氏は戰國から漢初にかけての國家の支配權力は君主の個人的意志の直接的發現という性格の強いものであったが、内朝の成立により初めて公權に基づく皇帝支配が確立したとされる。<sup>79)</sup>この見解を敷衍すると、本稿で述べた武帝期を起點とする全國的な變化の背景として前漢王朝の統治のあり方、ひいては國家構造の變化が想定されるが、この點についてのさらなる解明は大きな課題として今後に残される。

## 註

- (1) 増淵龍夫「漢代における國家秩序の構造と官僚」(『新版中國古代の社會と國家』、岩波書店、一九九六年、初出は一九五二年)、勞幹「論漢代的內朝與外朝」(『勞幹學術論文集甲編』上冊、藝文印書館、一九七六年、初出は一九六〇年)、「漢代尚書職任及其和內朝的關係」(『中央研究院歷史語言研究所集刊』第五一號、一九八〇年)、西嶋定生「武帝之死——『鹽鐵論』の政治史的背景——」(『中國古代國家と東アジア世界』、東京大學出版會、一九八三年、初出は一九六五年)、參照。
- (2) 鎌田重雄「漢代の尚書官——領尚書事と錄尚書事とを中心として——」(『東洋史研究』第二六卷第四號、一九六八年)、參照。
- (3) 同様な視點からする近年の研究として、好並隆司「前漢代の內朝と宿衛の臣」(『前漢政治史研究』、研文出版、二〇〇〇年、初出は一九九九年)等がある。
- (4) 富田健之「前漢武帝期以降における政治構造の一考察——いわゆる內朝の理解をめぐって——」(『九州大學東洋史論集』第九號、一九八一年)、參照。
- (5) 富田健之「前漢武帝期の側近政治と『公卿』」(『新潟大學教育人間科學部紀要 人文・社會科學編』第八卷第一號、二〇〇五年)、參照。
- (6) 富田健之「內朝と外朝——漢朝政治構造の基礎的考察——」(『新潟大學教育學部紀要』第二七卷第二號、一九八六年)、參照。
- (7) 富田健之「漢時代における尚書體制の形成とその意義」(『東洋史研究』第四五卷第二號、一九八六年)等、參照。
- (8) 藤田高夫「前漢後半期の外戚と官僚機構」(『東洋史研究』第四八卷第四號、一九九〇年)、米田健志「前漢後期における中朝と尚書——皇帝の日常政務との關連から——」(『東洋史研究』第六四卷第二號、二〇〇五年)等、參照。
- (9) 田中良「領尚書事と『政』の委任」(『鷹陵史學』第二四號、一九八九年)、參照。
- (10) 渡邊將智「兩漢代における公府・將軍府——政策形成の制度的變遷を中心に——」(『史滴』第二八號、二〇〇六年)、參照。
- (11) 渡邊將智「政策形成と文書傳達——後漢尚書臺の機能めぐって——」(『史觀』第一五九冊、二〇〇八年)、參照。
- (12) 富田健之「後漢前半期における皇帝支配と尚書體制」(『東洋學報』第八一卷第四號、二〇〇〇年)、參照。
- (13) 掾屬については、『續漢書』百官志 司徒の條に、「長史一人、千石、掾屬三十一人、令史及び御屬三十六人」とあり、また、同書同志 太尉の條の本注に、「東西曹の掾比四百石、餘の掾比三百石、屬比二百石。故に曰はく、公府の掾、古の元士三命に比せらるる者なり」とある。さらに、同條には、『漢書音義』を引いて、「漢書音義に曰はく、正は掾と曰ひ、副は屬と曰ふ」とある。以上をあわせ考えると、掾屬とは三公府において各曹を統轄する立場にあつ

た掾・屬の總稱であるといえる。

- (14) 渡邊將智氏によると、四府とは三公府に太傅府あるいは大將軍府を加えた總稱であるが、劉寵の司徒就任は大將軍寶武が誅殺され胡廣が太傅に就任した建寧元（一六八）年のことであるから、本史料に見える「四府」は太傅府と三公府を指すとする（註10）渡邊氏前掲論文、參照。

- (15) なお、周知のように「臺」は官府を指す場合がある。『後漢書』列傳第六四上袁紹列傳の注に、「晉書に曰はく、漢官尙書中臺たり、御史憲臺たり、謁者外臺たり。是れ三臺と謂ふ」とあるように、「臺」と呼ばれた官府には尙書・御史・謁者があつた。ただし、『後漢書』において御史の官府は「憲臺」あるいは「蘭臺」、謁者の官府は「外臺」と記載されるが、尙書が「中臺」と記載される事例は見られない。一方、「臺」とのみ記された場合、御史・謁者の官府を指すものはなく、すべて尙書と關係する記事である。

- (16) 渡邊信一郎『天空の玉座——中國古代帝國の朝政と儀禮——』（柏書房、一九九六年）、參照。
- (17) 永田英正「漢代の集議について」（『東方學報』第四三冊一九五二年）、渡邊信一郎「朝政の構造——中國古代國家の會議と朝政」（註16）渡邊氏前掲書所收、參照。
- (18) 楊樹藩「兩漢尙書制度的研究」（『大陸雜誌』第二三卷第三號、一九六一年）、周道濟「漢唐宰相制度」（嘉新水泥公曹文化基金會、一九六四年）等、參照。

- (19) 註(7)・註(12)富田氏前掲論文、富田健之「後漢時代の

尙書・侍中・宦官について——支配權力の質的變化と關連

して——」（『東方學』第六四輯、一九八二年）、參照。

- (20) 註(10)渡邊氏前掲論文、參照。

- (21) 註(8)米田氏前掲論文、參照。

- (22) 註(19)富田氏前掲論文、參照。

- (23) 渡邊信一郎氏は朝議における意思形成について、贊同者は議文のあとに署名を重ねていくとし、それを「署議」と稱するとされた（註16）渡邊氏前掲書、參照。

- (24) 註(10)渡邊氏前掲論文、參照。

- (25) 註(16)渡邊氏前掲書、參照。

- (26) 註(16)渡邊氏前掲書五八―六四頁、渡邊將智「後漢洛陽城における皇帝・諸官の政治空間」（『史學雜誌』第一一九編第二號、二〇一〇年）等、參照。

- (27) 註(7)富田氏前掲論文、參照。

- (28) 和田清編『支那官制發達史』（汲古書院、一九七二年、初出は一九三七年）、五七頁、參照。

- (29) 註(28)和田氏前掲書 五八頁、參照。

- (30) 註(4)富田氏前掲論文等、參照。

- (31) 註(8)藤田・米田兩氏前掲論文等、參照。

- (32) 註(8)米田氏前掲論文 一八頁、參照。

- (33) 註(6)富田氏前掲論文、參照。なお、鹽野貴啓氏は内朝を構成する侍中と給事中就任者を分析し、前漢では制度的に運用された側面が見られるものの加官であった點で未だ十分には制度化されておらず、そこに後漢との差異が見られると指摘される（鹽野貴啓「前漢の侍中と給事中」（『國

學院大學大學院紀要 文學研究科』第四二號、二〇一〇年）。

- (34) 『漢書』卷十 成帝紀の建始四年の條には、「四年春、中書宦官を罷め、初めて尙書員五人を置く」と「尙書員五人」とある。一方、『漢舊儀』には、「尙書四人もて四曹と爲し、常侍尙書 丞相御史の事を主り、二千石尙書 刺史二千石の事を主り、戸曹尙書 庶人の上書の事を主り、主客尙書 外國の事を主る。成帝 五人を置き、三公曹有り、斷獄の事を主る」と、四曹に分かれたのはあたかも成帝期ではないように記載される。この點に關して、櫻井芳朗氏は『晉書』職官志に基づき、「それは建始四年の尙書五人の中、一人は僕射であり、他の四人が四曹に分かれたとし、成帝が後に三公曹を設け、これによって五曹になったとするのである。この解釋はすべての記載を生かしたものである。この解すべきであろう。光武帝は更に之を六曹とする」とされる(註(28)和田氏前掲書、五七頁參照)。
- (35) 註(7)富田氏前掲論文、參照。
- (36) この條は、版本によって文字の異同が見られる。すなわち、百衲本では「東閣」に作り、中華書局本では「東閣」とする。ただし、本條において、顏師古は「閣」について注を附していることからすると、「東閣」とするほうが適切であると考えられる。よって、本稿では百衲本に従う。
- (37) 前漢後半期に表れた新しい曹としては、議曹(『漢書』卷八四 翟方進傳「翟方進 李尋に厚くし、以て議曹と爲す」、奏曹・集曹(同書卷八一 匡衡傳「主簿陸賜 故奏曹に居り、事に習ひ國界を曉知すれば、集曹掾に署せらるる」、侍曹(同書卷九二 陳遵傳「侍曹 軹ち寺舍に詣りて(陳) 遵に白す」)がある。なお、嚴耕望『中國地方行政制度史 甲部 秦漢地方行政制度』(中央研究院歷史語言研究所、一九六一年)では、郡府において、奏曹・議曹は門下に分類され、集曹は列曹に分類される。
- (38) 淺野裕一『黃老道の成立と展開』(創文社、一九九二年)、參照。
- (39) 拙稿「前漢における丞相司直の設置について——丞相制の展開と關連して——」(『九州大學東洋史論集』第三四號、二〇〇六年)、「前漢武帝期における中央支配機構の展開——所謂御史大夫と御史中丞の分化をめぐって——」(『日本秦漢史學會會報』第九號、二〇〇八年)、參照。
- (40) 註(13)、參照。
- (41) 註(28)和田氏前掲書、參照。
- (42) 禁中が皇帝の生活空間であったことについては、註(8)米田氏前掲論文、參照。
- (43) 註(8)米田氏前掲論文、青木俊介「漢長安城未央宮の禁中——その領域的考察——」(『學習院史學』第四五號、二〇〇七年)等、參照。
- (44) 楊鴻年『漢魏制度叢考』(武漢大學出版社、一九八五年)、參照。
- (45) 後漢の尙書の執務場所については、註(26)渡邊氏前掲論文、參照。
- (46) 佐原康夫「漢代の官衙と屬吏」(『漢代都市機構の研究』、

- 汲古書院、二〇〇二年、初出は一九八九年）、參照。
- (47) 森谷一樹「皇帝と百官のあいだ——宮廷と官制組織——」（『日本秦漢史學會會報』第四號、二〇〇三年）、參照。
- (48) 註(8)藤田氏前掲論文、參照。
- (49) 拙稿「前漢における内朝の形成——郎官・大夫の變遷を中心として——」（『史學雜誌』第二二〇編第八號、二〇〇一年）、參照。
- (50) 張家山漢簡『二年律令』では、史律第四七五簡に、「三歲ごとに壹たび并課し、取一人を取りて以て尙書卒史と爲す」と尙書卒史が見えるが、秩律には尙書關係の職名は一つも見えない。なお、釋文は彭浩・陳偉・王藤元男主編『二年律令與奏讞書——張家山二四七號漢墓出土法律文獻釋讀』（上海出版社、二〇〇七年）によった。
- (51) 註(19)富田氏前掲論文、參照。
- (52) 『續漢書』輿服志下の注に引く『東觀漢記』に、「建武元年、……大長秋・將作大匠・度遼諸將軍・郡太守・國傳相皆秩二千石、校尉・中郎將・諸郡都尉・諸國行相・中尉・內史・中護軍・司直秩皆二千石、以上皆銀印青綬。中外官尙書令……秩皆千石。尙書・中謁者・謁者……秩皆六百石。……秩有るは侍中・中常侍・光祿大夫秩皆二千石。……尙書・諫議大夫・侍御史・博士皆六百石」とある。閻步克氏は、前半が王侯に仕える者・文官・軍吏の秩級、「秩有るは」以下をそれには含まれない特殊な職とされる「閻步克『二年律令』中的宦皇帝者」（『從爵本位到官本位……秦漢官僚品位結構研究』、三聯書店、二〇〇九年）、參照。尙書は前半・後半ともに見られるが、このことは官僚秩序に組み込まれながらも皇帝との親近性を保持する尙書の位置づけを示すとも考えられる。
- (53) 註(46)佐原氏前掲論文、參照。
- (54) 後漢の史料ではあるが、『續漢書』百官志一 太尉の條に、「掾史屬二十四人」とあり、ここに註(13)で掲げた掾屬の注が附けられている。このことからすると、掾は掾史と稱されたとも考えられる。
- (55) 註(46)佐原氏前掲論文、參照。
- (56) 註(46)佐原氏前掲論文二四五頁、參照。
- (57) 註(37)嚴氏前掲書、參照。
- (58) 註(46)佐原氏前掲論文、參照。
- (59) 尹灣漢墓簡牘二號木牘正面二行目に、前漢後半期の東海郡の定員構成について、「大守の吏員廿七人。大守一人、秩□□□□、大守丞一人、秩六百石、卒史九人、屬五人、書佐九人、用算佐一人、小府嗇夫一人。凡そ廿七人」と記し、門下を含まないが、五號木牘背面第一段一行目には、實際の吏員構成を示し、「今掾史見九十三人、其廿五人見、十五人君卿門下、十三人故事を以て置き、廿九人治所に請ひて置き、吏嬴員廿一人」と「十五人君卿門下」を吏員に含む。これも門下の變遷に關する佐原氏の指摘に合致する。なお、釋文は張顯成・周羣麗撰『尹灣漢墓簡牘校理』（天津古籍出版社、二〇一一年）によった。
- (60) 註(46)佐原氏前掲論文、參照。

- (61) 註(8)米田氏前掲論文、参照。
- (62) 註(37)嚴氏前掲書、参照。
- (63) 安作璋・熊鐵基兩氏も主簿を門下の一員として位置づけている(『秦漢官制史稿』、齊魯書社、一九八五年)。
- (64) 註(46)佐原氏前掲論文、参照。
- (65) 紙屋正和「兩漢時代における郡府・縣廷の屬吏組織と郡・縣關係」(『漢時代における郡縣制の展開』、朋友書店、二〇〇九年)、参照。
- (66) ここでの評點は中華書局本に従った。富田健之氏によれば、「中」とは皇帝との親近性を表すチームである(註(4)富田氏前掲論文、参照)。その用例としては『史記』卷一二五佞幸列傳に、「孝文の時中の寵臣、士人は則ち鄧通、宦者は則ち趙同・北宮伯子」とある。ここで、郡府における郡太守と屬吏との關係が朝廷における皇帝と官僚との關係と同様であったとする佐原氏の見解(註(46)佐原氏前掲論文、参照)に従えば、ここでの「中」は太守と主簿との親近性を示すと考えられる。
- (67) 註(46)佐原氏前掲論文、参照。
- (68) 本條は、『北堂書鈔』卷七二設官部第二五主簿の條の「排閭入諫」の條に引用されているが、このことを踏まえると、「閭」は「闔」と同義であると考えられる。さらに、『史記』卷二二〇汲黯列傳に、「黯病多尪、閭閻の内に臥せて出でず」とあり、同書卷一一七司馬相如列傳の子虛賦に、「奔星は閭闔を更、宛虹は楯軒に拖く」とある。「閭閻」・「閭闔」という語がともにあることからすると、
- (69) 「閭」・「闔」は通用しあうと考えられる。
- (70) 註(65)紙屋氏前掲論文、参照。
- (71) 註(7)富田氏前掲論文、参照。
- (72) 重近啓樹「前漢の國家と地方政治——宣帝期を中心として——」(『駿臺史學』第四四號、一九七八年)、紙屋正和「武帝期における郡・國の守・相の職權強化」(註(65)紙屋氏前掲書所收)、佐藤直人「秦漢期における郡・縣關係について——縣の性格變化を中心に——」(『名古屋大學東洋史研究報告』第二四號、二〇〇〇年)、小嶋茂稔「前漢における郡の變容と刺史の行政官化についての覺書」(『山形大學歴史・地理・人類學論集』第五號、二〇〇四年)等、参照。
- (73) 重近氏は「特に武帝期以降、かかる豪族に対する厳しい彈壓が加えられ、宣帝期にもその政策が引きつがれてきた」(註(71)重近氏前掲論文、九二頁)と述べ、小嶋氏は「武帝期についていえば、その治世の初期には災害の發生等を受けて『天下に赦す』など、必ずしも積極的とはいえない方法が採られているが、その中期になるに従って、【12】のように『郡』に勸農を命じたり【13】のように水害を受けた地域への博士官の派遣などの政策が採られるようになる」と述べられている(註(71)小嶋氏前掲論文、九〇頁)。
- (74) 山田勝芳氏は張家山漢簡から前漢初期における郡の地位の高さと權限の強さを指摘し、從來前漢前期には縣の獨立性が強いことを強調されてきた點に疑義を呈される(山田

勝芳「張家山第二四七號漢墓竹簡『二年律令』と秦漢史研究」〔『日本秦漢史學會會報』第三號、二〇〇二年〕、参照。ただし、紙屋氏が指摘されるように、『二年律令』を見ても、前漢前半期に郡府の組織が十分に整備されていなかったことが窺われる（註(65)紙屋氏前掲論文）。このことをあわせ考えると、前漢後半期に郡の機構にさらなる展開があった蓋然性が高く、それは山田氏の見解とも必ずしも矛盾するものではないと考えられる。

(74) 渡邊信一郎『中國古代國家の思想構造——專制國家とイデオロギー』（校倉書房、一九九四年）、参照。

(75) 下倉涉『「三公」の政治的地位について』（『集刊東洋學』第七八號、一九九七年）、参照。

(76) 拙稿「前漢における中央監察の實態——武帝期における整備を中心として——」（『東洋學報』第八八卷第二號、二〇〇六年）、参照。

(77) 仲山茂「漢代における長史と屬史のあいだ——文書制度の観点から——」（『日本秦漢史學會會報』第三號、二〇〇

二年）、参照。

(78) 渡邊信一郎氏の地方長官に關する議論は、専ら『後漢書』に依據されており、それを前漢にまで及ぼすのは問題とされるかもしれない。ただし、氏は郡太守と屬吏層との第二次的君臣關係の事例として、『後漢書』列傳第一九鄧渾列傳に見える汝南太守歐陽歙の功曹であった鄧渾の事例を挙げている（註(74)渡邊氏前掲書、一三八頁）。嚴耕望『兩漢太守刺史表』（商務印書館、一九四八年）によると、歐陽歙が汝南太守であったのは建武七（三一）年から八年間と後漢の最初期であり、よって、地方における第二次的君臣關係も前漢からすでに芽生えていたと考えられる。註(16)渡邊氏前掲書、一一九頁には、「秦漢時代から六朝末にいたるまでの諸王朝は、二つの質を異にする君臣關係によって統合されていた」とあり、渡邊氏が前漢をも射程に入れているのは明らかである。

(79) 註(7)富田氏前掲論文、参照。



“itinerant labor” in private enterprises (with the exception of farms) was a cause of the rise of the *yongjia*.

## THE SHANGSHU AND NEICHAO DURING THE HAN DYNASTY

FUKUNAGA Yoshitaka

This article makes an examination of the dynamic changes in the relationships of the *shangshu* 尚書 and the *neichao* 內朝 with the emperor from the middle period of the Former Han through the Later Han dynasties and thereby explores an aspect of the structural changes in the bureaucratic system during the period.

During the Later Han, the *shangshu* for the emperor and *yuanshu* 掾屬 for the *sangong* 三公 were known as *houshe* (喉舌) and each functioned as the office 官房 for those they served. It is thought that the *shangshu* and *yuanshu* were involved in policy debates in the *tai* 臺 and *sangongfu*, respectively, and that the unified opinions decided therein were exchanged and debated by them. This manner of decision-making has its beginnings in reign of Emperor Wu of the Former Han. In other words, during that period close advisors, who would later grow into the *neichao* gathered around the emperor, and likewise Gong Sunhong 公孫弘 who was then *chengxiang* 丞相, gathered talented outsiders 賓客 and had them participate in “policy deliberations” 謀議. Then the emperor’s close advisors and the *gongqing* 公卿 would undertake policy debates. At first, the core of the offices were occupied by those who had personal ties with either the emperor or the *sangong*, but they were gradually incorporated into the bureaucratic order. In this way the process of transformation of the core of the office of the emperor from intimates into the *neichao* and then *shangshu* and the reorganization of the office of the *chengxiang* can be understood as corresponding to one another. Moreover, a similar structure can be seen in the *junfu* 郡府. In other words the *zhubu* 主簿 and *menxia* 門下 corresponded to the *shangshu* and *neichao* respectively.

This phenomenon indicates an aspect of the commonality shared by the emperor, *chengxiang*, and regional officials, but one point that should receive particular attention is that the period of Emperor Wu’s reign was the starting point for the expansion and reorganization of all three. In other words, in the first half of the Former Han, the organization of the *junfu* had not yet been fully systematized,

but with that reign of Emperor Wu, it began to be more bureaucratized and expanded. This began with the full development of the organization of the *menxia*. Considering the result of the examination of correspondence of the *neichao* and the *menxia* of the *junfu*, we can see that they shared a common directionality. That being the case, the formation and strengthening of the *shangshu* and *neichao* that began in the period of the reign of Emperor Wu of the Former Han can be grasped as a nation-wide reaction and that was not limited to the central government.

## A CONSIDERATION OF THE WATER RESOURCES OF THE GUSHUI RIVER IN LUOYANG DURING THE HAN-WEI PERIOD

SHIOZAWA Hirohito

In examining the environments that sustain cities as large-scale settlements, there is no questioning the fact that the water environment is an essential issue. This article deals with the extraordinary city of Luoyang during the Han-Wei period, and in examining its geographic location and the character of its river water in terms of quality and quantity, the existence of the Gushui 穀水 River, the third river of the Luoyang Basin, is recognized as the most important element of the water environment in sustaining the city. In this article, I publish the results of local surveys conducted intermittently while I was in Luoyang, as well as a reconstruction of the Gushui waterways based on the reports of new excavations and the locations of systemic water-related archaeological sites and argue the place of the Gushui in the context of the environment sustaining the city.

The mere mention of Luoyang brings to mind the geography of the city governed by the Luoshui 洛水 River. However, the difference in relative elevations of the base of Mt. Mangshan 邙山 and the river's course is great, and thus there were many difficulties in making use of the Luoshui. People thus sought to use the Gushui (the modern-day Jianhe 澗河 River). However, it was the Yangqu 陽渠 Channel that was the irrigation channel that drew water from the Gushui. I had previously proposed the location of the Yangqu Channel on the basis of my topographical survey, and with the successive publication of the results of